The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「お大事に」を胸に
Author(s)	八亀, 裕美
Citation	語文. 2022, 118, p. 8-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「お大事に」を胸に

八亀裕美

一冊のファイルがある。開けると、宮地裕先生の文字が目に飛び込んでくる。先生からいただいた葉書やカードの数々。人生の節目で私を支えてくれた宮地先生からの言葉。そのいくつかをご紹介することで、宮地裕先生追悼文執筆の責を果たしたい。

（一）「短い二年だったけれども、深く期して待っていたいものを感じさせてもらったことを、うれしくもありがたくも思っている。これからが人生の勝負だから、しっかり生きていってほしい。」（卒業の際にいただいたカード）

卒業と同時に大学を離れ、大阪府立高校教諭としてのキャリアをスタートすることになっていた私にとって、身の引き締まるお言葉だった。

宮地先生御退官と同時に阪大を卒業したため、私は阪大最後の宮地ゼミの卒業生である。ゼミは独特の緊張感があった。特に用語の使い方には慎重になるように指導があった。今でも、論文を書くときに、用語に迷うと、先生の声が聞こえてくる。四年生の途中で、卒論の方向性を大きく変更した時も、驚かれたが、一切非難はされなかった。ただ、ポツリと「以前のものもおもしろかったのだけれど」とつぶやかれたことは記憶にある。学生を指導する立場になって、先生の懐の深さに感謝の念を深くしている。

（二）「御精進の大学院合格をまずは深くおよろこび申し上げます。志を立てて、新しい道を拓いてゆくことが当然とは言え、多くの困難を越えてゆくことだと、私も身に沁みて思うので、おっしゃるとおり「これからが大変」とはお察しするものの、きっとあなたならば、しっかりと一歩一歩進んでゆかれるだろうと信じています。成果の一端なりとも、拝見する機会を持てれば、晩年の一つの楽しみとさせていただきます。（以下略）」（大学院合格をお知らせしたとき）

高校教諭として十一年勤務した後、退職し、阪大の研究生とな

り、一年後、大学院に入学した。指導教員は工藤真由美先生。すでに柔軟性も落ちてきている頭をフル回転させて、なんとか食らいついていく毎日だったが、宮地先生に研究の成果を少しでも多くお届けしたいという気持ちが糧となり、乗り切ることができた。

（三）「期して待った修論が立派な刊行物として眼前にあり、手に取ればその重さとも言えるものが、なんとなく心をはずませるようでもあり、御鄭重なあとがきに恐縮しながらなんとなく胸に迫るものがあるようでもあります。前後して、工藤さんたちの方言研究の大報告書をいただき、阪大日本語の元気のいいことは、気持ちのいいほどです。とりあえずおよろこびとお礼を申しのべます。お大事に。」（修士論文をお届けしたとき）

いただいた時に、もしかすると先生は、卒業時のカードに何を書いたかを記憶していらっしゃるのだろうか、と驚いた。偶然かもしれないが、卒論から修論までの長い年月を考えるとき、冒頭の「期して待った」は重かった。

（四）「言語学会の発表、期待しています。（中略）できれば九大まで出かけたいと思うので、日程表を送っていただけませんか。言語学会には入っていないので。FAXかMailでいかが？（後略）」（言語学会発表が決まったことをお知らせしたとき）

福岡で、発表前夜に夕食をご馳走になった。盃をゆったりと口に運びながら「やっぱり日本酒は大吟醸がいいと思う」と満足そうにおっしゃっていた姿が目に浮かぶ。一度も参加したことがない言語学会に来てくださったことが有り難くまたもったいなかった。

（五）「ご懇書とともにご労作をいただきました。晩年にして深い感動を与えられています。多年のご労苦、工藤さんとの出あい、昔からのご縁を思って、あとがきにも接すれば、感慨を禁じえません。／時代の動きは激しく厳しいものがありますが、一方でこれが時代というものかもしれない、その中で流れ行き移ろい行く社会の姿が歴史というものとして描かれるのかもしれないと思います。言語は言語活動・言語生活として生きるものでしょうが、そこから抽象して言語の体系あるいは部分体系を論述する一種美的な言語作品が、言語研究の論文というものではないかと、近頃特にあるいは改めて、思います。／次々の成果を期待しています。／いずれまたお目にかかりましょう。／ご自愛の上、ご健闘を念じてやみません。」（博士論文をお届けしたとき。「／」は改行）

自分の論文の文体は「論文らしくない」と評されることがあるが、甘んじて受けようと思う。宮地先生の御論文は、書き手の顔が見える。論文の文体については、宮地先生の弟子らしくありたい。

（六）「（前略）改めて、根本的な言語観とその記述・解釈について、あれこれ考えさせられています。（中略）たまたま、また敬語

のことを少し考えていて、諸言語の敬語表現論があってもいいと思っている所です。（後略）」（本をお送りしたとき）

２００８・11・17の日付がある葉書。この年の六月に出た『日本語学』二七巻七号に「『敬語の指針』について」という御論考を寄せておられるので、この時期、世界の諸言語も視野に入れて敬語のことをもう少しまとめたいと構想されていたことがわかる。拝読したかった。

宮地先生にご指導をいただいたのは、学部時代の短い期間であったが、研究の道を再び志してからも、折に触れて気遣いをいただいてきた。全てをご紹介できなかったが、今回読み直し、自分にとって先生がどれほど大きな存在であったかを改めて感じた。

今後とも、宮地先生に少しでも多くのそして良質の御報告ができるように、精進していきたい。先生からの葉書はよく「お大事に。」で締められていた。気づけば自分も還暦が遠くない。先生のご長寿に少しでも近づけるように、毎日を大事に生きていきたい。

（やかめ・ひろみ　琉球大学教授）